

# 道德教育の授業開発に関する基礎的研究（1）

—モラルジレンマに関する実態調査から—

A Fundamental Study on Class Improvement of the Moral Education

—From the fact-finding survey about the Moral Dilemma—

藤井基貴・加藤弘通

FUJII Motoki and KATO Hiromichi

（平成21年10月6日受理）

## I 問題と目的

2008年度の学習指導要領の改訂により、学校現場には道德教育のさらなる充実が求められている。新しい学習指導要領は、週1時間の「道德の時間」を全教育課程を通して行われる道德教育の「要」として位置づけており、各学校には「道德教育推進教師」が設置される。道德教育推進教師には、全校的な視野にたつて道德教育を推進するための環境整備および全体計画の作成等で主導的な役割を担うことが期待されている。

こうしたなかで「要」となる「道德の時間」を教師が構想していく際に、大きな課題となるのは「魅力ある教材」と「多様な指導法」の開発となる。価値が多様化する現代社会においては、教材および指導法も多様に用意される必要があり、近年ではさまざまな実践が開発されている。それらは大きく「伝統主義的アプローチ」と「進歩主義アプローチ」とに区分することができる（林，2009）。

伝統主義的アプローチとは、道德的価値の伝達を重視する指導法であり、「副読本」の資料を中心に授業を組み立てるスタイルがとられる。副読本を用いる授業実践は、1958年に「道德の時間」が特設されて以来、日本の道德教育の基本スタイルとなってきた。ある調査によれば小学校では96%、中学校では88.4%の教員が副読本を「よく使う」、「時々使う」資料として挙げている（姫野ら，2006）。

その一方で、副読本をはじめとする「読み物資料」による授業は、資料に内在する道德的価値を児童生徒に教え込むだけの「価値注入型授業」に陥りやすいという問題点も指摘されている（宇佐美，1989）。こうした認識のもとで、1980年代後半から「進歩主義的アプローチ」と呼ばれる「モラルジレンマ授業」、「構成的グループエンカウンター」、「ディベート」等の子どもたちの主体性および「道德的価値の創造」を重視した新たな実践研究が進められている。なかでも大学発の道德教育の授業実践として注目をあつめてきたのが「モラルジレンマ授業」である。同授業は元兵庫教育大学教授荒木紀幸を中心としてプログラムの開発が行われてきた（荒木，1986）。

モラルジレンマ授業は、コールバーグが提案した認知的道德性発達理論に基づく授業実践である。同授業における教師の役割は、道德的価値の葛藤を含んだ資料を児童生徒に示し、討議の場を設定することにある。授業中は多くの時間が話し合い活動にあてられており、締めくく

りに際しても教師が正答をまとめるようなことはしない(=オープンエンド方式)。モラルジレンマ授業の目的は、児童生徒が討議を通して、それぞれの道徳的判断力を主体的に高めることにある。兵庫教育大学方式のモラルジレンマ授業では、2時間でひとつの資料を用いており、初回と2回目の時間を一週間ほどあけることで、「価値の葛藤状況」に対して児童生徒が各自でじっくりと考えることができるよう配慮されている。

道徳教育の新たな授業実践を開発し、教師の専門性をさらなる向上を図るうえで大学の教員養成課程に対する期待もまた高まっている。しかしながら、現状では大学の「道徳の指導法」の授業科目は2単位に限られており、教育内容も大学間でかなりの差異がみられる。「モラルジレンマ」の資料やその指導法に限ってみても、どこの大学でも教えられているというわけではない。国立大学の教員養成系学部を中心とした調査によれば、モラルジレンマを取り上げている大学は全体の25パーセントほどにすぎないという報告もある。加えて、それらの講義のなかでコールバーグの理論を紹介しないケースもみられる(姫野ら, 2009)。

こうした背景には日本独自のモラルジレンマ受容の状況がある。コールバーグは、道徳性の発達段階を、道徳的価値の葛藤を含んだ状況に対する児童生徒の下した判断の根拠に求めており、判断の根拠がより上位の段階のものへと変化することに討議の役割を認めている。これに対して、「日本の実践では、学習指導要領に記された内容項目をジレンマ討論を通じて教えるというスタイル」(林, 2009)が広く採用されており、道徳的価値を伝えるという「伝統主義的アプローチ」にも軸足をおいたものとなっている。

こうした状況を鑑みると、道徳教育の授業開発をすすめるにあたっては、大学の教員養成課程の教育内容と教育現場のニーズとのズレ、西洋的な人間形成観に基づく道徳教育の諸理論と日本の道徳教育理解とのズレを埋め合わせていく作業が必要となろう。

本研究では、こうした理論背景を別として、教育現場ではモラルジレンマがどの程度使用されているのか、また誰が使用しているのか、さらにはどのような効果を期待して使用しているのか、といった実態を明らかにする。先行研究においても、モラルジレンマの実態の把握は十分になされていない状況にある。以下では、小学校教員を対象とした質問紙調査を通して、①モラルジレンマ授業はどの程度行われているのか、②学校現場にはどのような教育機会、人的ルートを通して導入されているのか、③教師たちはどのような効果を期待しているのか、を考察する。

## II 方法

### 1. 調査対象

A県B市(政令指定都市)の全小学校(96校)の教員1,441名(男性565名、女性876名)を対象に、質問紙調査を行った。調査機関は2008年11月～12月である。

### 2. 調査内容

質問紙調査の内容は、性別、年齢をたずねるフェイスシートに加え、以下の項目から構成されていた。(1)長期研修(半年以上)の経験を調べるために、「大学院での研修」、「教育センターでの経験」、「その他の公共施設・一般企業」、「長期研修の経験なし」について、「ある・ない」の2件法で答えてもらった。

(2)モラルジレンマの使用経験を調べるために、モラルジレンマについての例を示しつつ、

『道徳の時間』においてモラルジレンマを用いた授業を行ったことがありますか」という質問に「ある・ない」の2件法で答えてもらった。

(3)モラルジレンマの効果についての認識を調べるために、モラルジレンマを使用した経験がある教師に対してのみ、『道徳の時間』にモラルジレンマ資料を用いることは、児童生徒に次のような力を身につけさせるのにどの程度有効だと思われますか」という質問のもと、8項目に対して「有効ではない（1点）～有効である（5点）」の5件法で答えてもらった。具体的な項目については、Table 7, Table 8を参照のこと。

### Ⅲ 結果

#### 1. 教育現場におけるモラルジレンマの使用の実態

Table 1 はモラルジレンマの使用経験の割合を男女別に示したものである。 $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な差が認められ ( $\chi^2(1)= 25.82$ ,  $p<.01$ )、女性教員に比べ、男性教員のほうが使用経験が高いことが分かる。

Table 1 モラルジレンマの使用実態

		モラルジレンマ使用経験		合計
		なし	ある	
男	%	51.35	48.65	557
	N	286	271	
女	%	64.94	35.06	850
	N	552	298	
合計	%	59.56	40.44	1407
	N	838	569	

次に年代別に、モラルジレンマの使用経験を示したのが、Table 2である。 $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な差が認められ ( $\chi^2(5)= 26.81$ ,  $p<.01$ )、20代と50代後半の教員の経験が有意に低く、40代後半の教員の経験が有意に高いことが分かる。つまり、教育現場におけるモラルジレンマの実践について、世代による差があることが分かる。

Table 2 年代別モラルジレンマの使用実態

		モラルジレンマ使用経験		合計
		なし	ある	
20代	%	72.63	27.37	190
	N	138	52	
30代	%	58.82	41.18	255
	N	150	105	
40代前半	%	53.92	46.08	217
	N	117	100	
40代後半	%	53.92	46.08	332
	N	179	153	
50代前半	%	57.79	42.21	100
	N	167	122	
50代後半	%	70.43	29.57	115
	N	81	34	
合計	%	59.51	40.49	1398
	N	832	566	

## 2.長期研修経験とモラルジレンマの使用の関係

Table 3は長期研修の経験の有無とモラルジレンマの使用経験の有無の関係を示したものである。 $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な差が認められ ( $\chi^2(1) = 5.43, p < .05$ )、研修経験がある者のほうが、ない者に比べ、モラルジレンマの使用経験が高いことが分かる。

		モラルジレンマ使用経験		合計
		なし	ある	
研修経験あり	%	46.67	53.33	75
	N	35	40	
研修経験なし	%	60.24	39.76	1333
	N	803	530	
合計	%	59.52	40.48	1408
	N	838	570	

さらにどのような研修とモラルジレンマの使用経験が関連をしているかを検討するために、大学院、教育センター、その他の研修経験に分け検討したものが、Table 4, Table 5, Table 6である。 $\chi^2$ 検定を行った結果、大学院での研修経験とモラルジレンマの使用経験についてのみ有意な差が認められた ( $\chi^2(1) = 5.43, p < .05$ )。つまり、大学院での研修経験がある者のほうが、ない者に比べ、モラルジレンマの使用経験が高いことが分かる。

なお、教育センターやその他公共施設・一般企業での研修経験の有無によるモラルジレンマの使用経験には、差は見られなかった。

		モラルジレンマ使用経験		合計
		なし	ある	
研修経験あり	%	33.33	66.67	33
	N	11	22	
研修経験なし	%	60.15	39.85	1375
	N	827	548	
合計	%	59.52	40.48	1408
	N	838	570	

		モラルジレンマ使用経験		合計
		なし	ある	
研修経験あり	%	59.81	40.19	1381
	N	826	555	
研修経験なし	%	44.44	55.56	27
	N	12	15	
合計	%	59.52	40.48	1408
	N	838	570	

Table 6 その他公共施設・一般企業での研修経験とモラルジレンマの使用経験

		モラルジレンマ使用経験		合計
		なし	ある	
研修経験あり	%	59.42	40.58	1390
	N	826	564	
研修経験なし	%	66.67	33.33	18
	N	12	6	
合計	%	59.52	40.48	1408
	N	838	570	

以上のことをまとめると、教育現場におけるモラルジレンマの使用実態としては、男性教員と40代後半の教員、また大学院での研修経験のある者の使用経験が高いといえる。

### 3. モラルジレンマの効果の認識

モラルジレンマの効果の認識について、男女および世代間で差がみられるかを検討した（Table 7）。その結果、男女差については、「自分が住んでいる地域や国を大切に思う気持ちを養う」（ $t(563)=2.26, p<.05$ ）と「他者を思いやる気持ちを養う」（ $t(564)=3.02, p<.01$ ）、「命を大切に思う気持ちを養う」（ $t(560)=3.06, p<.01$ ）で有意な差がみられ、いずれの項目も男性教員より女性教員の得点が高かった。男性教員に比べ、女性教員のほうが上記の項目においてモラルジレンマはより効果があると認識していることが分かる。

さらに詳細な検討を加えるならば、差がみられた項目は自分以外のもの（国、地域、他者、生命）といった「他への配慮」にあるので対し、差が認められなかった項目は（自己理解、規範意識）などの自己成長に関わるものである。前者を「対他的な効果」と考え、後者を「対自的な効果」と考えるならば、教員におけるモラルジレンマの効果に対する認識の性差は「対他的な効果」の項目であられる。

Table7 モラルジレンマの効果の認識についての男女差

	男	女	t 値
自分自身への理解を深める	N=266 3.97 (0.81)	N=296 4.06 (0.76)	1.32
ルールや規範意識を養う	N=267 3.78 (0.86)	N=295 3.88 (0.78)	1.49
多角的な（複眼的な）視点を養う	N=269 4.30 (0.82)	N=298 4.37 (0.81)	1.10
自分が住んでいる地域や国を大切に思う気持ちを養う	N=267 2.88 (0.74)	N=298 3.01 (0.70)	2.26*
他者を思いやる気持ちを養う	N=268 3.71 (0.87)	N=298 3.92 (0.79)	3.02**
命を大切に思う気持ちを養う	N=266 3.45 (0.85)	N=296 3.66 (0.79)	3.06**
正義や公正さを養う	N=267 3.96 (0.80)	N=299 4.01 (0.82)	0.69
批判的思考を養う	N=268 3.65 (0.91)	N=298 3.57 (0.92)	1.02

( )内は標準偏差, \*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$

また世代差については、分散分析を行った結果、「自分が住んでいる地域や国を大切に思う気持ちを養う」という項目において、有意傾向がみられた ( $F(5, 556)=1.96, p<.10$ )。多重比較の結果、50代後半の教員に比べ、20代の教員のほうが、有意に得点が低いことが分かった。つまり、20代後半の教員に比べ、50代の教員のほうが、「自分の住んでいる地域や国を大切に思う気持ちを養う」ことについて、モラルジレンマに効果があると認識していることが分かる。なお他の世代間については差はみられなかった。

Table8 モラルジレンマの効果の認識についての世代差

	20代	30代	40代前半	40代後半	50代前半	50代後半	F値
自分自身への理解を深める	N=51 4.14 0.80	N=104 3.92 0.87	N=100 4.00 0.79	N=150 4.03 0.74	N=122 4.04 0.73	N=33 4.06 0.86	0.59
ルールや規範意識を養う	N=51 3.94 0.86	N=103 3.78 0.86	N=99 3.82 0.81	N=152 3.84 0.78	N=121 3.81 0.83	N=33 3.94 0.79	0.41
多角的な（複眼的な）視点を養う	N=52 4.60 0.63	N=105 4.40 0.94	N=99 4.28 0.88	N=151 4.31 0.76	N=123 4.24 0.78	N=34 4.32 0.77	1.63
自分が住んでいる地域や国を大切に思う気持ちを養う	N=52 2.77 0.67	N=105 2.88 0.76	N=100 3.04 0.75	N=150 2.90 0.69	N=121 3.02 0.74	N=34 3.12 0.64	1.96+
他者を思いやる気持ちを養う	N=52 3.98 0.80	N=105 3.85 0.86	N=100 3.85 0.78	N=150 3.77 0.84	N=122 3.75 0.87	N=34 3.97 0.80	0.97
命を大切に思う気持ちを養う	N=52 3.62 0.87	N=104 3.59 0.84	N=98 3.50 0.80	N=149 3.52 0.82	N=122 3.58 0.83	N=34 3.74 0.79	0.57
正義や公正さを養う	N=52 4.04 0.84	N=105 4.03 0.84	N=100 3.94 0.83	N=151 4.05 0.75	N=121 3.87 0.86	N=34 4.12 0.77	1.06
批判的思考を養う	52 3.56 1.04	105 3.50 1.05	99 3.49 0.96	150 3.73 0.84	123 3.63 0.82	34 3.76 0.78	1.43

( )内は標準偏差, +  $p<.10$

## 考察

以上の結果から、①モラルジレンマ授業は小学校教員の4割程度が実施していることが明らかとなった。その内訳は女性教員よりも男性教員の使用経験が高く、とりわけ40代後半の教員による使用頻度が高い。②また、モラルジレンマを使用している教員は大学院での長期研修を受けた経験が高いこともわかった。③効果についての理解では、男女差および世代差が認められた。女性教員はモラルジレンマに「自分が住んでいる地域や国を大切に思う気持ちを養う」、「他者を思いやる気持ちを養う」、「命を大切に思う気持ちを養う」といった「対他的な効果」があると考えている。

モラルジレンマ授業は、兵庫教育大学での研究プロジェクトにはじまり導入から約20年がたっている。この間、モラルジレンマは教育学者のあいだで道德教育の新たな指導法として大きな注目と期待を集めてきた。しかしながら、本調査によれば、現状ではまだ4割程度の導入

にとどまっております、依然として大学院での長期研修が教育現場への導入に際して重要な役割を果たしているということが明らかとなった。換言すれば、モラルジレンマは大学との結びつきが強い教員を通して取り組まれている実践であるともいえ、現場に根差した道徳教育の実践とはまだいえない状況にある。

今後の課題となるのは、①モラルジレンマと他の道徳教育の実践との関係である。具体的には、教師が他の道徳実践と比較して、どのような効果をモラルジレンマに期待しているのかを明らかにすることである。というのも、モラルジレンマはコールバーグの理論に基づく一つの指導法であり、教師が利用する際にはその効果を十分に理解し、状況や指導計画に応じて使い分ける技量が求められるためである。

また、②モラルジレンマを現場に根差した実践にするために必要な条件とは何かを明らかにすることも重要な課題となる。実践を改善するために教育現場ではいかなる工夫や検証が必要なのか、また教員に対しては、どのような研修を実施していくことが効果的なのかを明らかにしていく必要がある。これらの課題の解明については他日を期したい。

## 文献

- 荒木紀幸編 1988 道徳教育はこうすればおもしろい：コールバーグ理論とその実践。北大路書房
- 荒木紀幸・佐野安仁編 1990 道徳教育の視点。晃洋書房
- 宇佐美寛 1989 「道徳」授業に何ができるか。明治図書。
- 小寺正一・藤永芳純編 2009 三訂道徳教育を学ぶ人のために。世界思想社。
- 林泰成 2009 新訂道徳教育論。放送大学教育振興会。
- 姫野完治・細川和仁 2006 「道徳の時間」の実際と教員養成に求められること、日本教育方法学会第42回大会発表要旨、96。
- 姫野完治・細川和仁 2009 小中学校教員から見た「道徳の時間」の実際と教員養成の役割、日本教育大学協会研究年報、第27集、67-79。

